

## 弥生集落と環状倉庫群

**弥生時代の環濠集落** ニュースレターの第4弾となる今回提供させていただく話題は、弥生時代の集落遺跡と方位の関係についてです。稲作文化が定着した弥生時代中期（BC.300～BC.1頃）までの弥生ムラは、周囲に溝を巡らせた大規模な環濠集落が基本であったと言われます。ただし後期（AD.1～AD.200頃）になると、環濠は廃れ集落の規模も縮小し、分散化が進みます。

この変化は環濠集落の解体と呼ばれ、社会構造のうえで弥生ムラは大きな変容を遂げたと言われています。それまでの人びとの絆や共同性を重視する意識は急速に薄れ、階層分化に向かったと言うわけです。そののちに前方後円墳時代を迎えますから、その前提条件として階層分化の顕在化が認められなければならない、環濠集落の解体＝階級社会の到来という理論的な図式が与えられることになった、とも言えるでしょう。私には賛成しかねる図式ですが、今回は踏み込みません。

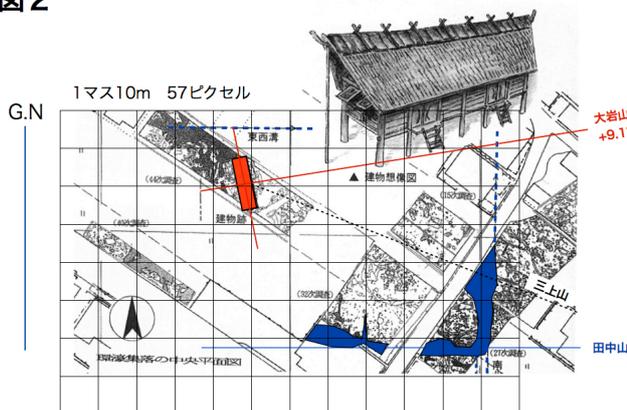
問題の可否は別として、弥生中期の環濠集落から後期の環状施設への変化を典型的に示す事例のひとつに、琵琶湖の東岸にある滋賀県守山市の下之郷遺跡と伊勢遺跡があります。位置関係を図1に示しました。そして2018年1月の中旬、私はこれら二つの遺跡をGPS持参で訪ねてきました。

守山市や野洲市、それに草津市一帯では、端整な相貌をみせつつ東にそびえる標高432mの三上山が古くから近在の人びとの信仰を集め、このエリアにおける「神奈備山」として有名です。なお「神奈備山」の代表例は奈良県の三輪山ですが、原義は保立道久先生が適確に指摘なさったとおり、火山だとみるのが妥当です。火山への畏怖心が原点となって、似た相貌の山を火山にみたくて信仰する営みを各地に派生させたのであろう、と理解されるのです。じっさいに三上山の別名は「近江富士」です。ですから三上山への信仰が擬似火山信仰であることは疑問の余地がない、とも言えるでしょう。新幹線の3列座席側（海側）の車窓からもよく見えますので、皆様におかれましても滋賀県を通過される際にご確認いただければ幸いです。



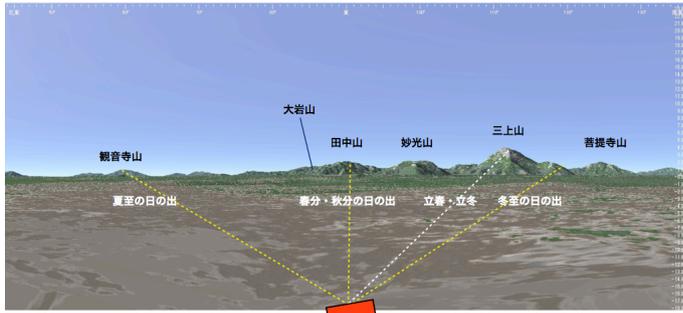
**下之郷遺跡の検討** さて大環濠集落遺跡の下之郷遺跡ですが、東側の景観は大岩山-田中山-妙光山-三上山-菩提山の一連の山並となります。いうまでもなく日の出側の山並ですが、なかでも三上山は最も目立つ山ですし、扇状地の端に位置するこの遺跡からみれば、東の山並は遺跡の周囲に流れる川の水源側にもあたります。ですからこれらの山並は下之郷遺跡を営む弥生水稻農耕民にとって、水源側の象徴にみたくてられた可能性も高いと考えられるのです。ちょうど奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡と、東側にそびえる龍王山一帯「御諸山」（三輪山はその南端にあって冬至の指標）との関係に対応

図2



下之郷遺跡中心域の大型建物（独立棟持柱倉庫）と正面観

図3



下之郷遺跡中心域の大型建物（独立棟持柱倉庫）と年間の日の出  
BC.100

する景観だと私はみています。詳しくは拙著をご参照ください。

次に、この下之郷遺跡の中心付近からは長大な独立棟持柱建物跡がみつっています。そのため唐古・鍵遺跡のケースと同様、正面観の復元とGPS観測をおこないました。まず正面観ですが、真東から9°北に振れるという特徴をもち、その延長線上には大岩山（現在は消滅）が重なります（図2）。ですからこの建物は大岩山を遙拝する格好で建てられたとみることができそうです。

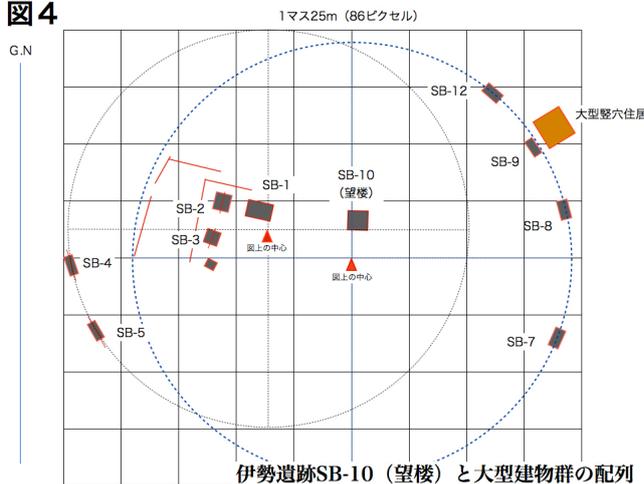
大岩山は日本列島内でも有数の銅鐸埋納地として知られています。ですから銅鐸の埋納場所に大岩山が選ばれたことと、下之郷遺跡の大型建物の正面観がそこを向くこととは深い関係があるように思われます。とはいえ大岩山銅鐸は弥生後期になって埋められたと考えられますので、大型建物の方が古く、時制は一致しないという難点があります。

なお大型建物の周囲を方形に区画する溝があり、溝の軸線はほぼ正方位に沿っています。この区画の南東隅ラインを東に延長すれば、田中山に重なる、という関係になります。三上山を集落内の施設の配列に取り込むような状況はみられないこともわかりました。

さらに年代を紀元前100年（中期後半）にセットし、年間の日の出方位と山並との関係を点検してみました。その結果、夏至の日の出は観音寺山から、春分・秋分の日の出は田中山から、冬至の日の出は三上山の南斜面3合目付近からとなりました。では三上山山頂からの日の出を迎えるのはいつかと言えば、立冬と立春になります（図3）。唐古・鍵遺跡からみた巻向山に該当するのですが、こうした現象の意味を詰めることが今後の課題です。

**伊勢遺跡の検討** 次は伊勢遺跡です。下之郷遺跡が廃れたのは弥生中期末で、ちょうど紀元前と紀元後の境界付近の年代ですが、そののち紀元後1世紀後半に出現するのがこの遺跡です。場所は下之郷遺跡から南方に3kmほど隔たったところにあります。この遺跡で注目されるのは、集落の東側一帯に倉庫群だと推定される独立棟持柱建物数棟が、望楼跡かと推定される大型建物を中心に環状に巡ることです。半径が100mを超える大規模な円周を描くとも言われ、発掘調査後には詳細なCG画像も描かれ「近江の吉野ヶ里」だとも喧伝され、近畿地方では一時期話題になりました。

図4



伊勢遺跡SB-10（望楼）と大型建物群の配列

私はこの望楼の位置をGPSで観測したのち、下之郷遺跡と同様に年間の日の出の方位と東側の山並との関係を点検しようと計画し、作業を進めています。その際に必要な作業は倉庫群と望楼など主要な建物跡の位置情報を確定することですが、現時点で私が入手しえた資料にもとづき、国土座標上の北（G.N）を基準として主要な建物の配置を復元してみたものが図4です。

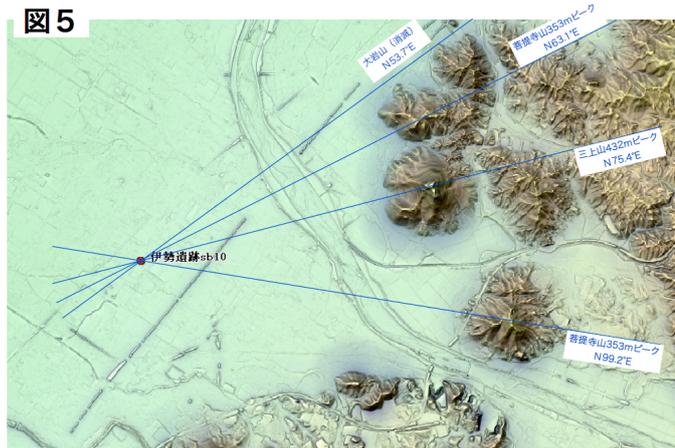
こうして図化してみると、SB-10（望楼）の南壁ラインより真南に13m移動させ

た地点を仮想上の中心とする、半径98m前後の正円を描くかのように東側の倉庫群 (SB-12~SB-7) が配置されていることがわかります。SB-9の北東側には、この倉庫址と軸線を揃えた大型竪穴式住居址がみつかっています。またこの仮想上の円は、西側でSB-1~SB-3を囲う柵列跡 (外側) の流れに沿うことがわかりますので、ほぼ妥当な想定ではないかと考えています。いっぽうSB-10 (望楼) より西側に40m隔てたところには別の大型建物 (SB-1) や独立棟持柱建物2棟 (SB-2・SB-3)、二重の柵列が存在します。さらにSB-1より7mほど南の地点を仮想上の中心とする半径88mの円に沿って、西側にも独立棟持柱倉庫2棟 (SB-4・SB-5) があります。

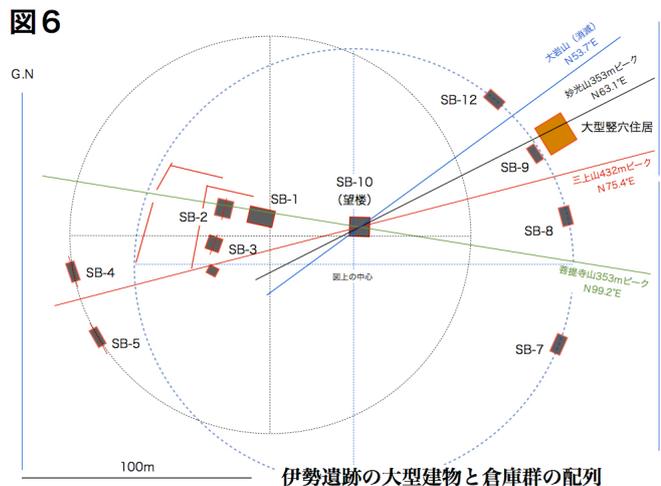
そのうえでSB-10 (望楼) からみた東側の山並の主要な峰嶺の方位をこの図にあてはめてみました (図5・図6)。すると大型竪穴式住居の軸線は妙光山に向いていることがわかります。この住居の正面観は隣接するSB-9と併せ、妙光山に照準を合わせた建物軸線であった可能性が高いといえるようです。また菩提寺山の方向に揃えてSB-1とSB-2は建てられた可能性も高いことがわかります。

ただし肝心の三上山に軸線を揃えた建物はSB-8のみで、SB-10や西側の建物群には、三上山との方位を揃えるものや、直線上に連なるような配列は認められないことも同時に判明しました。下之郷遺跡とともども三上山との疎遠さにはやや困惑させられますが、この問題は陽宅風水との絡みで読み解ける可能性を秘めているように思います。

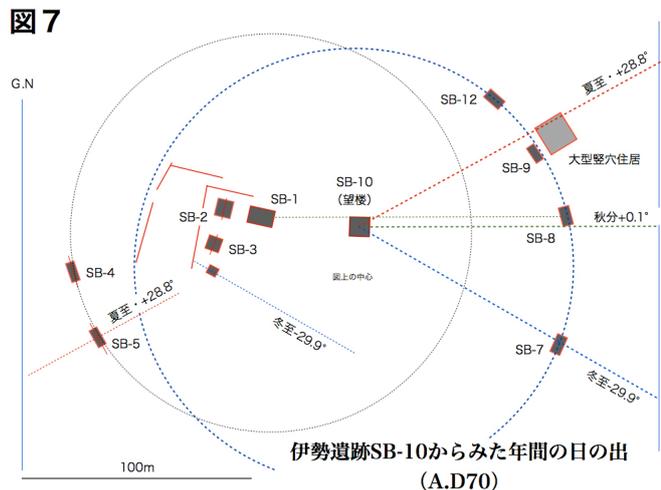
次に年代を西暦70年 (本遺跡の大型建物柱材から導かれた年代) にセットして、SB-10からみた年間の日の出方位を点検してみました。その結果が図7です。この作業を目論んだ当初、円周上に配された倉庫群の方位は年間の節目となる日の出方位と対応する可能性を想定したのですが、残念ながら中途半端な結果となりました。SB-10の中心とSB-7の中心とを結ぶラインは冬至の日の出方位そのものでした。SB-5の軸線が夏至の日の出方位に向くことや、SB-3の南に配された小型建物が冬至の日の出方位に向くこともわかります。



伊勢遺跡 SB-10からみた東の山並と主要な峰嶺



伊勢遺跡の大型建物と倉庫群の配列



伊勢遺跡SB-10からみた年間の日の出 (A.D70)

ただし他の節目となる期日の日の出方位と倉庫群の位置が対応するようにはみえません。また三上山からの日の出となるのは4月28日と8月21日の両日でした。

今回は詰められませんでしたが、日の入り方位との関係を併せて今後検討する必要があります。現在、守山市教育委員会に詳細なデータ提供を依頼中ですので、次の機会にはもう少し厳密性を担保した成果をお示ししたいと考えます。

**縄文時代建物との関係** では、なぜ今回の検討作業を急いだのかというと、それは独立棟持柱建物の性格を再検討するためです。この独特な構造の建物は稲粳を取める倉庫であろうと言われます。のちの神社建築にも引き継がれますから、伊勢神宮や出雲大社本殿の大元は稲倉であったと説かれてもいます。

ただしこの定説的な見解は、弥生時代以降の資料を抜き出して検討する場合にかぎって成り立つことで、それより前の縄文時代の資料を視野に入れると、かなり異なった見解へと誘われるのです。

縄文時代後期には秋田県の大湯環状列石に代表されるとおり、環状配石墓が日本列島の北部エリアでさかんに築かれます。ここで注目されるのは、配石墓の外縁には複数の掘建柱建物が環状に配される事例の多いことがわかってきたことです。さらにこれら掘建柱建物の柱の配置は独立棟持柱建物と酷似しているのです。伊勢遺跡の状況は、環状に配された倉庫群の内側から配石墓を抜き、代わりに望楼を彷彿とさせる大型建物を配した状況のようにもみえるのです。だから伊勢遺跡の分析が鍵を握ると思うのです。

独立棟持柱建物の紀元が縄文時代後期にさかのぼることを最初に指摘したのは村上恭通さんです。いわく「縄文文化研究では、これらはしばしば亀甲形柱配置等と呼ばれ、柱穴間を亀甲上につないで平面形を復元するばあいが多く、弥生時代の建物復元でおこなわれるように方形建物部分の中軸を通るように棟持柱の柱穴同士をつなぐならば、これは独立棟持柱建物以外の何ものでもない」（村上2000,192頁）として、相互の類似性を指摘しました。そのうえで「漢人の蕃夷意識をとらえた要素は銅鐸祭祀のみならず、独立棟持柱付建物を演出装置とした祭祀を含むような、近畿地方における精神的、文化的、社会的基盤構造にあったと考えたい」（村上2000,193頁）と述べたのです。

もちろんこの見解は学界の主流派から不評を買いました。弥生時代の神殿や神社建築が先住民たる縄文伝統下にあることを認める見解ですし、文明側からみた場合には、近畿地方の未開性を象徴するものであったはずだという「あぶない」所見です。それゆえ古墳時代研究者に多い畿内中心主義者からの拒絶反応にあったのです。

しかし事実関係を詰める作業において、縄文時代遺跡と弥生時代遺跡との間にあらかじめ仕切りを設けることのほうが危ない方向であることも間違いのないところですので、改めて検討の俎上に乗せるべきだと思い立ちました。今回紹介させていただいた検討作業は、上記のような目論みに沿って開始したものです。科研費の申請が通った暁には本格的に踏み込みたいと考えます。

#### 【引用文献】

村上恭通2000「鉄器生産・流通と社会変革」『古墳時代像を見なおす』（青木書店）